

青年期の家族内葛藤と家族アイデンティティ発達の関連

光元麻世・岡本祐子

The relationships between domestic conflicts and family identity development in adolescence

Mayo Mitsumoto and Yuko Okamoto

個人化が進むと同時に、家族の親密さ、絆の希薄さが指摘されている現代家族にとって、家族の絆、つまり家族としてのアイデンティティは重要な意味を持つと考えられる。林・岡本(2003, 2005)は、家族アイデンティティを「自分は家族の一員であるという感覚が、斉一性と連続性を持って自分自身の中に存在し、またそれが他の家族成員にも承認されているという認識」であると定義している。本研究では青年が青年期前期に体験した家族内葛藤について調査し、青年期前期の家族内葛藤と青年期後期の家族アイデンティティの発達レベルの関連性を明らかにすることを目的とした。その結果、青年期における家族アイデンティティは、青年期前期からの家族内葛藤を乗り越えることにより、形成されることが示唆された。また、家族内葛藤の収束と家族アイデンティティ発達にとって、現在、青年が親の対応についてどのように捉えているかが重要であることが示唆された。

キーワード：青年期、家族内葛藤、家族アイデンティティ

問題と目的

個人化が進むと同時に、家族の親密さ、絆の希薄さが指摘されている現代家族にとって、家族の絆、つまり家族としてのアイデンティティは重要な意味を持つと考えられる。林・岡本(2003, 2005)は、家族アイデンティティを「自分は家族の一員であるという感覚が、斉一性と連続性を持って自分自身の中に存在し、またそれが他の家族成員にも承認されているという認識」であると定義している。そして現在や過去の非日常・日常場面における家族との関わりやその意義を認めることが、家族アイデンティティの発達において重要な役割を果たすことを明らかにしている。これらの研究では、青年の家族への行動レベルの関与のみを扱っているが、家族アイデンティティには、感情・情緒による関係性も大きな影響を及ぼす。関係性の発達においては、葛藤体験にいかに関与するかということが重要な鍵になる(永田, 2002)。青年期前期は、家族内の葛藤が増加する時期である。この時期の家族内葛藤は、若者が自分自身の関心や考えを主張し、家族の中でより対等な役割を獲得しようとするときに生じることが多い(Kroger, 2000 榎本 2005)。このような家族内葛藤を家族に受けとめてもらうことにより、新たに居場所を見出し、自分自身が他の家族と対等な家族の一

員であるという認識が形成されていくと考えられる。つまり、青年の家族アイデンティティは、主に青年期前期に生じる家族内葛藤を乗り越えていくことによって、青年期前期から青年期後期にかけて発達していくと推察される。

そこで、本研究では、現代家族において、青年がこれまで、特に青年期前期にどのような家族内葛藤を体験し、その際の親の対応についてどのように感じているかを調査し、それらと青年期後期の家族アイデンティティの発達レベルの関連性を明らかにすることを目的とする。家族内葛藤については、親子間の葛藤に焦点を当てることとし、「両親に対して何らかの不満を感じたり、あるいは両親から非難、叱責を受たりして、心理的に強い葛藤を体験し、何らかの行動的反応をすること」と定義する。仮説としては、(1) 林ら (2005) と同様に女子青年の方が男子青年よりも家族アイデンティティの発達レベルが高いこと、(2) 親の対応について現在肯定的な評価をしていることと家族内葛藤が収束していることは関連があること、(3) 家族内葛藤を体験し、既に葛藤が収束した青年の家族アイデンティティの発達レベルが高いこと、(4) 親の対応について現在肯定的な評価をしている青年の家族アイデンティティの発達レベルが高いことの4つが考えられる。

方法

1) 調査対象者と調査時期

A 大学生、男性 136 名、女性 170 名、計 306 名 (調査対象者のうち 69 歳の男性 1 名は青年期に当てはまらないので除いた) に対し、集団質問紙調査を行った。平均年齢は 20.44 歳 ($SD = 1.45$)、年齢の範囲は 19-24 歳であった。調査時期は、2008 年 6 から 10 月であった。

2) 質問紙構成

① 家族内葛藤に関する自由記述。まず、対父親・母親別に体験した葛藤エピソードについて具体的に記述を求めた。そして、そのエピソードにおける青年の反応、父親・母親の対応、父親・母親の対応についての当時・現在の評価、その葛藤が収束したか否かについて記述を求めた。② 家族アイデンティティ尺度 37 項目 (林ら, 2005) (5 件法)。「家族の存在感」「家族価値との連合性」「家族との関係性」「対家族的自己」「自己に対する家族の評価」の 5 因子から構成されている。③ フェイス項目 (学年、年齢、性別、家族の同居の有無)。

結果

1) 家族アイデンティティ

1-1) 信頼性の検討

本研究では、林ら (2005) の家族アイデンティティ尺度について、尺度の信頼性を検討する多面 cronbach の α 係数を算出したところ、全 37 項目では $\alpha = .96$ で有り、因子ごとでは、F1「家族の存在感」は $\alpha = .93$ 、F2「家族価値との連合性」は $\alpha = .86$ 、F3「家族との関係性」は $\alpha = .86$ 、F4「対家族的自己」は $\alpha = .80$ 、F5「自己に対する家族の評価」は $\alpha = .77$ で有り、十分な値が得られ、信頼性が確認された。したがって、本研究では、先行研究に基づく 5 因子 37 項目を分析に用いることとした。

1-2) 性差の検討

家族アイデンティティ尺度の平均値と男女ごとの平均値を算出した (Table 1)。家族アイデンティティ得点の男女の平均値の差を検討するために t 検定を行った結果、尺度合計と F1「家族の存在感」、F4「対家族的自己」、F5「自己に対する家族の評価」において有意差が認められた (順に、 $t(304) = -3.39$, $p < .001$, $t(304) = -4.60$, $p < .001$, $t(304) = -2.82$, $p < .001$, $t(304) = -3.65$, $p < .001$)。これより、男子青年よりも女子青年の方が、家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示された。

Table 1
家族アイデンティティ得点の平均値 (SD) と男女ごとの平均値 (SD)

| | 全体 | | 男性 | | 女性 | | t値 |
|----------------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|-----------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | |
| 尺度合計 | 126.35 | 21.49 | 121.62 | 19.77 | 130.14 | 22.11 | -3.51 *** |
| F1 家族の存在感 | 47.35 | 9.40 | 44.71 | 8.49 | 49.46 | 9.85 | -4.54 *** |
| F2 家族価値との連合性 | 23.59 | 4.85 | 23.20 | 4.69 | 23.91 | 4.97 | -1.27 |
| F3 対家族的自己 | 18.70 | 4.27 | 17.93 | 4.20 | 19.31 | 4.24 | -2.84 ** |
| F4 家族との関係 | 20.81 | 4.05 | 20.50 | 3.79 | 21.06 | 4.25 | -1.21 |
| F5 自己に対する家族の評価 | 15.90 | 2.81 | 15.28 | 2.73 | 16.39 | 2.79 | -3.52 *** |

** $p < .01$, *** $p < .001$

2) 家族内葛藤

2-1) 家族内葛藤体験の有無

家族内葛藤体験のエピソードについて得られた記述より、家族内葛藤体験の有無を分類した (Figure 1)。306 名のうち、64 名 (20.9%) が両親とも葛藤を体験し、78 名 (25.6%) が父親のみと葛藤を体験し、78 名 (25.6%) が母親のみと葛藤を体験し、82 名 (26.8%) は葛藤を体験していなかった。また、4 名は葛藤体験を思い出すことが出来なかった。本研究では、家族内葛藤を次の 2 つの視点から区分する。第一に、父親と母親の両方および、どちらか一方と体験した葛藤を「対両親葛藤」とする。第二に、父親または母親と体験した葛藤をそれぞれ「対父親葛藤」、「対母親葛藤」と呼ぶこととする。「対両親葛藤有り群」は 220 名 (72.8%)、「対両親葛藤無し群」は 82 名 (27.1%) であった。また、「対父親葛藤有り群」は 142 名 (47.0%)、「対父親葛藤体験無し群」は 160 名 (53.0%)、「対母親葛藤有り群」は 142 名 (47.02%)、「対母親葛藤無し群」は 160 名 (53.0%) であった。

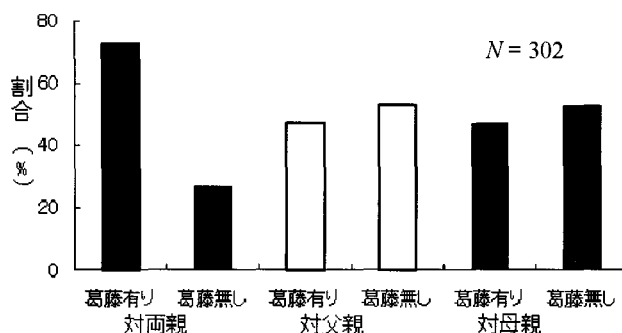


Figure 1. 家族内葛藤の有無による分類 (%)

2-2) 父親と母親の対応に対する当時と現在の評価

質問紙で得られた父親、母親のそれぞれの対応についての当時と現在の評価に関する記述を肯定、否定、中立の3つに分類した。Table 2 は、評価の分類基準とその内容例を示している。父親・母親別に肯定・否定・中立の比率を算出したところ、父親、母親の対応に対して、当時では否定的評価（それぞれ 75.4 %、78.8 %）が最も多く、現在では肯定的評価（それぞれ 56.7 %、69.3 %）が最も多く、否定的評価はそれぞれ 28.3 %、17.5 %に減少していた (Figure 2, 3)。

Table 2
父親・母親の対応に対する評価の分類

| 分類 | 基準 | 内容例 |
|----|---------------------------------------------|-----------------------------------|
| 肯定 | 親の対応について、感謝している、または親の立場に立った理解を示し、意味を見出している。 | 心配だったのだろうな。 有難いと思った。 |
| 否定 | 親の対応について、理解しがたいと感じており、否定的な感情を抱いている。 | 腹立たしい。 鬱陶しい。自分の考えを押し付けないでほかった。 |
| 中立 | 親の対応について、肯定的・否定的な感情のどちらも感じていない。 | 特に何も感じなかった。 |

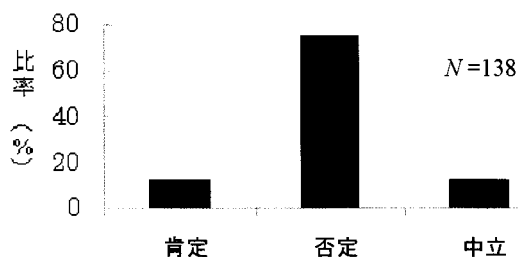


Figure 2. 父親の対応に対する当時の評価分類 (%)

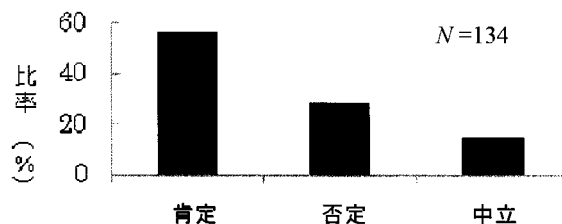


Figure 3. 父親の対応に対する現在の評価分類 (%)

2-3) 家族内葛藤の収束

質問紙で得られた記述より、対父親、対母親別に葛藤が収束したか否かを分類し、その比率を算出した (Figure 4)。対父親、対母親葛藤の多くが収束していた（それぞれ 83.3 %、84.6 %）。また、対父親、対母親葛藤が全て、つまり、対両親葛藤が収束しているか否かを分類し、その比率を算出した (Figure 5)。青年が体験した葛藤の多くが収束しており(81.0 %)、対父親、対母親葛藤の両方、またはどちらか一方が収束していないものは全体の 19.0 %であった。

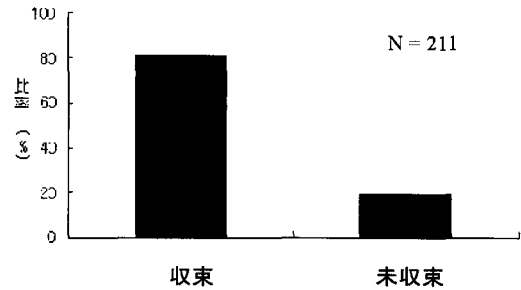
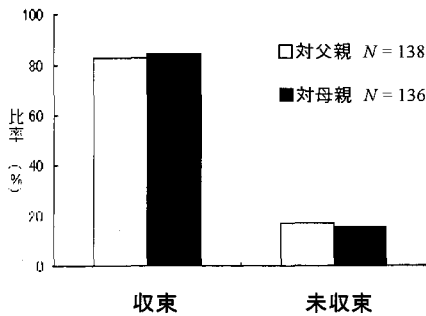


Figure 4. 対父親葛藤が収束したか否かの割合 (%) Figure 5. 対母親葛藤が収束したか否かの割合 (%)

Table 3 は、同居の有り・無しにおける家族内葛藤の収束または未収束の人数を示したものである。2×2 の直接確率計算法を行った結果、対母親葛藤、対両親葛藤において、有意であった（順に、 $p < .01$, $p < .05$ ）。そこで、対母親葛藤、対両親葛藤においては同居の有無別に 1×2 の直接確率計算法を行った。その結果、対母親葛藤では同居有りは有意ではなく、同居無しは有意であった ($p < .001$)。同様に対両親葛藤では、同居有りは有意ではなく、同居無しは有意であった ($p < .001$)。また、2×2 の直接確率計算法を行った結果、対父親葛藤では、優位傾向に留まった。

以上より、家族と同居していないことと対母親葛藤と対両親葛藤が収束していることは関連があることが示された。

Table 3
同居の有無別の家族内葛藤収束・未収束人数(人)

| | 同居 / | 収束 | 収束 | 未収束 |
|-----|------------|---------|---------|-----|
| 対父親 | 有り (N=18) | 12 | 6 | |
| | | (-66.7) | (-33.3) | |
| 対母親 | 無し (N=120) | 103 | 17 | |
| | | (-85.8) | (-14.2) | |
| 対母親 | 有り (N=15) | 8 | 17 | |
| | | (-53.5) | (-46.7) | |
| 対両親 | 無し (N=121) | 107 | 14 | |
| | | (-88.4) | (-11.6) | |
| 対両親 | 有り (N=26) | 16 | 10 | |
| | | (-61.5) | (-38.5) | |
| 対両親 | 無し (N=185) | 155 | 30 | |
| | | (-83.8) | (-16.2) | |

注) 下段の () 内の数値は同居の有無ごとの%

Table 4 は、親の対応についての現在の評価（肯定・否定・中立）における家族内葛藤が収束、または未収束の人数を示したものである。3×2 の直接確率計算法を行った結果、対父親葛藤、対母親葛藤において、有意であった（順に、 $p < .001$, $p < .01$ ）。そこで、評価ごとに 1×2 の直接確率計算法を行った。その結果、対父親葛藤では、肯定群と中立群は有意であり（順に、 $p < .001$, $p < .001$ ）、否定群は有意でなかった。同様に、対母親葛藤では、肯定群と中立群は有意であり（順に、 $p < .001$, $p < .01$ ）、否定群は有意でなかった。以上より、対父親葛藤、対母親葛藤における父親、母親の対

応について現在肯定的、中立的に捉えていることは葛藤が収束していることと関連があることが示された。

Table 4

親の対応についての現在の評価 (肯定・否定・中立)
における家族内葛藤収束・未収束人数 (人)

| 評価 | 収束 | 収束 | 未収束 |
|-----|-----------|-------|-------|
| 対父親 | 肯定 (N=76) | 70 | 6 |
| | | -92.1 | -7.9 |
| | 否定 (N=38) | 23 | 15 |
| | | -60.5 | -39.5 |
| | 中立 (N=20) | 19 | 1 |
| | | -95.0 | -5.0 |
| 対母親 | 肯定 (N=96) | 86 | 10 |
| | | -89.6 | -10.4 |
| | 否定 (N=23) | 14 | 9 |
| | | -60.9 | -39.1 |
| | 中立 (N=17) | 15 | 2 |
| | | -89.6 | -11.8 |

注) 下段の () 内の数値は同居の有無ごとの%

3) 家族内葛藤と家族アイデンティティ発達の関連

3-1) 家族内葛藤の有無と家族アイデンティティ発達の関連

家族アイデンティティ得点の対両親葛藤体験有り群と葛藤体験無し群の平均値の差を検討するために t 検定を行った (Table 5)。その結果、F2「家族価値との連合性」のみにおいて有意差が認められた ($t(304) = -2.74, p < .01$)。また、同様に対父親・対母親葛藤についても、家族アイデンティティ得点の葛藤体験有り群と葛藤体験無し群の平均値の差を検討するために、 t 検定を行った。その結果、尺度合計とすべての因子において、有意差は認められなかった。

以上より、家族内葛藤の有無により、家族アイデンティティの発達レベルには差がないことが示された。ただし、家族内葛藤を体験していない青年は家族内葛藤を体験している青年よりも、他の家族成員の価値観と一致した価値観をもっていることが示唆された。

Table 5

対両親葛藤体験の有無別の家族アイデンティティ得点の平均値

| | 葛藤あり | | 葛藤なし | | t値 |
|----------------|--------|-------|--------|-------|----------|
| | M | SD | M | SD | |
| 尺度合計 | 140.97 | 24.37 | 145.39 | 23.01 | -1.42 |
| F1 家族の存在感 | 51.75 | 10.24 | 52.49 | 9.20 | -0.57 |
| F2 家族価値との連合性 | 26.61 | 5.53 | 28.54 | 5.10 | -2.74 ** |
| F3 対家族的自己 | 32.77 | 5.78 | 33.90 | 5.72 | -1.52 |
| F4 家族との関係性 | 22.19 | 5.00 | 23.00 | 4.74 | -1.28 |
| F5 自己に対する家族の評価 | 7.64 | 1.65 | 7.46 | 1.45 | 0.86 |

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-2) 家族内葛藤の収束と家族アイデンティティ発達の関連

対両親葛藤の収束群と未収束群の家族アイデンティティ得点の平均値の差を検討するために t 検定を行った (Table 6)。その結果、尺度合計と全ての因子において有意差が認められた (順に、 $t(209) = -4.06, p < .01, t(209) = 3.26, p < .01, t(209) = 3.37 < .001, t(209) = -2.16, p < .01, t(209) = 3.08, p < .01, t(209) = -2.16, p < .01$)。これより、青年期に体験した家族内葛藤が収束している青年は、まだ収束していない青年よりも家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示された。

Table 6

対両親葛藤の収束・未収束別の家族アイデンティティ得点の平均値

| | 収束 | | 未収束 | | t値 |
|----------------|--------|-------|--------|-------|----------|
| | M | SD | M | SD | |
| 尺度合計 | 144.33 | 22.10 | 127.52 | 29.18 | 4.06 ** |
| F1 家族の存在感 | 52.88 | 9.44 | 47.18 | 12.04 | 3.26 ** |
| F2 家族価値との適合性 | 27.32 | 5.14 | 24.08 | 6.75 | 3.37 *** |
| F3 対家族的自己 | 33.68 | 5.28 | 29.10 | 6.50 | 4.72 ** |
| F4 家族との関係性 | 22.66 | 4.72 | 20.00 | 5.70 | 3.08 ** |
| F5 自己に対する家族の評価 | 7.79 | 1.52 | 7.18 | 2.00 | 2.16 ** |

* $p < .05, **p < .01, ***p < .001$

3-3) 家族内葛藤体験の有無・収束と家族アイデンティティ発達の関連

家対両親葛藤の有無と収束したか否かの組み合わせにより、①対両親葛藤体験が有り、しかも既に収束している群 (有り・収束群)、②対両親葛藤体験が有り、まだ収束していない群 (有り・未収束群)、③対両親葛藤体験が無い群 (無し群) の3群に分類した。この3群の家族アイデンティティ得点の平均値の差について検討するために一要因分散分析を行った (Table 7)。その結果、尺度合計と全ての因子で有意差が認められた (順に、 $F(2, 303) = 9.03, p < .001, F(2, 303) = 5.51, p < .01, F(2, 303) = 8.31, p < .001, F(2, 303) = 11.94, p < .001, F(2, 303) = 5.97, p < .01, F(2, 303) = 3.12, p < .01$)。これより、家族内葛藤を体験し、既に収束している方が、体験したがまだ収束していないよりも家族アイデンティティの発達レベルが高く、体験したが収束していない方が、葛藤自体を体験していないよりも家族アイデンティティの発達レベルが低くなる傾向が示唆された。また、家族内葛藤体験が有り、収束している場合と家族内葛藤を体験していない場合とでは、家族アイデンティティの発達レベルに差は見られなかった。つまり、家族内葛藤を体験していない青年も家族内葛藤を体験し乗り越えた青年と同様に家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示唆された。

Table 7

対面親葛藤の有無・収束別の家族アイデンティティ得点の平均値

| 葛藤の有無・収束 | 有り・収束 有り・未収束 無し | | | F | 下位検定の結果 |
|----------------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------|---------------------------|
| | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | |
| 尺度合計 | 144.33 (22.10) | 127.52 (29.18) | 144.58 (23.14) | 9.03 *** | 無し>有り・未収束 有り・収束>有り・未収束 |
| F1 家族の存在感 | 52.88 (9.44) | 47.18 (12.04) | 52.19 (9.52) | 5.51 ** | 無し>有り・未収束 有り・収束>有り・未収束 |
| F2 家族価値との適合性 | 27.32 (5.14) | 24.08 (6.75) | 28.12 (4.99) | 8.31 *** | 無し>有り・未収束 有り・収束>有り・未収束 |
| F3 対家族的自己 | 33.68 (5.28) | 29.1 (6.50) | 33.79 (5.68) | 11.94 *** | 無し>有り・未収束 有り・収束>有り・未収束 |
| F4 家族との関係性 | 22.66 (4.72) | 20.00 (5.70) | 23.04 (4.70) | 5.97 ** | 有り・未収束<なし 有り・収束>有り・未収束 |
| F5 自己に対する家族の評価 | 7.79 (1.52) | 7.18 (2.00) | 7.44 (1.52) | 3.12 ** | 無し>有り・未収束 有り・収束>有り・未収束 |

注1) 葛藤有り・収束群 $N = 171$, 葛藤有り・未収束群 $N = 40$, 葛藤なし群 $N = 95$ 注2) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3-4) 父親・母親の対応についての評価と家族アイデンティティ発達の関連

父親、母親の対応に対する現在の評価における肯定群、中立群、否定群の3群の家族アイデンティティ得点の平均値の差を検討するために、一要因分散分析を行った (Table 8, 9)。その結果、父親の対応に対する評価において、尺度合計と因子のF1「家族の存在感」、F2「家族価値との適合性」、F3「家族との関係性」で有意差が認められた (順に、 $F(2, 133) = 4.21, p < .05$, $F(2, 133) = 4.80, p < .01$, $F(2, 133) = 3.19, p < .05$, $F(2, 133) = 3.72, p < .05$)。また、母親の対応に対する評価において、尺度合計と因子のF1「家族の存在感」、F2「家族価値との適合性」、F3「家族との関係性」、F4「対家族的自己」で有意差が認められた (順に、 $F(2, 134) = 9.58, p < .001$, $F(2, 134) = 8.57, p < .001$, $F(2, 134) = 9.50, p < .001$, $F(2, 134) = 5.89, p < .001$, $F(2, 134) = 7.40, p < .001$)。これより、父親、母親の対応に対して現在、肯定的な評価をしている方が、家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示唆された。

Table 8

父親の対応に対する現在の評価 (肯定・中立・否定) ごとの家族アイデンティティ得点の平均値

| 父の対応の評価 | 肯定 | 中立 | 否定 | F | 下位検定の結果 |
|----------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------|----------------|
| | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | |
| 尺度合計 | 145.29 (22.20) | 140.43 (24.91) | 131.50 (26.81) | 4.21 * | 肯定>否定 |
| F1 家族の存在感 | 53.40 (9.05) | 51.81 (9.72) | 47.32 (11.62) | 4.80 ** | 肯定>否定 |
| F2 家族価値との連合性 | 27.81 (5.33) | 25.67 (6.45) | 25.13 (6.09) | 3.19 * | 肯定>否定 |
| F3 対家族的自己 | 33.18 (5.31) | 33.71 (5.07) | 30.39 (6.45) | 3.72 * | 肯定>否定 中立>否定 |
| F4 家族との関係性 | 22.96 (4.61) | 21.33 (5.73) | 21.37 (4.84) | 1.82 | |
| F5 自己に対する家族の評価 | 7.94 (1.66) | 7.90 (1.67) | 7.29 (1.71) | 1.99 | |

注1) 肯定群 N=77, 中立群 N=21, 否定群 N=38

注2) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 9

母親の対応に対する現在の評価 (肯定・中立・否定) ごとの家族アイデンティティ得点の平均値

| 母の対応の評価 | 肯定 | 中立 | 否定 | F | 下位検定の結果 |
|----------------|-------------------|-------------------|-------------------|----------|----------------|
| | M (SD) | M (SD) | M (SD) | | |
| 尺度合計 | 146.62 (20.04) | 136.33 (27.44) | 124.13 (30.10) | 9.58 *** | 肯定>否定 |
| F1 家族の存在感 | 54.34 (8.39) | 49.44 (12.69) | 45.54 (12.20) | 8.57 *** | 肯定>否定 |
| F2 家族価値との連合性 | 27.89 (4.72) | 4.72 (4.93) | 22.67 (7.30) | 9.50 *** | 肯定>否定 中立>否定 |
| F3 対家族的自己 | 33.77 (5.21) | 33.89 (4.64) | 29.54 (7.06) | 5.89 *** | 肯定>否定 中立>否定 |
| F4 家族との関係性 | 22.87 (4.38) | 19.72 (6.51) | 19.00 (6.17) | 7.40 *** | 肯定>否定 肯定>中立 |
| F5 自己に対する家族の評価 | 7.75 (1.59) | 7.06 (1.92) | 7.38 (1.93) | 1.49 | |

注1) 肯定群 N=95, 中立群 N=18, 否定群 N=24

注2) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

考察

本研究の目的は、青年期中期から後期にかけて体験した両親との家族内葛藤の体験・収束と青年後期における家族アイデンティティの発達レベルの関連性を数量的に検討することであった。

1) 家族アイデンティティ

家族アイデンティティの性差について検討した結果、男子青年よりも女子青年の方が、家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示された。これは、林ら (2005) と同様の結果であり、仮説は支持された。また、このような家族アイデンティティの発達レベルにおける性差は、「家族の存在感」、「対家族的自己」、「自己に対する家族の評価」において見られ、「家族価値との連合性」と「家族との関係性」においては見られないことが示された。つまり、女子青年は家族そのものの存在をより重視し、家族に対し、よりありのままの自分を表現することができ、家族に肯定的に評価されているという安心感をもっている傾向があると考えられる。

一方、家族の価値観との一致の程度や家族との関係性の深さ、良好さに性差はかないことが分かった。男女差が生じた要因として、林ら (2005) は、男子青年の場合、「分離」や「個体化」など、個としての自立を社会から要請されるが、女子青年の場合、「世話」や「他者との関係」といった人とのつながりが重視されることを挙げている。そのため、家族との関係においても、男子青年は距離が有り、家族とのかかわりの程度が低く、家族の一員としての認識も育成されにくかったと考えられる。一方、女子青年の場合は、家族との関わりを人との関わりの中の1つとして重視することにより、家族アイデンティティのレベルが深まったと考えられる。

2) 家族内葛藤

家族内葛藤について、体験の有無と収束という観点から検討した。家族内葛藤における親の対応に対する評価と家族内葛藤の収束についてである。葛藤が生じた際、青年は様々な行動的な反応を示す。それらに対する父親、母親の対応について、当時では多くの青年が否定的に捉えるが、現在 (大学生) では多くの青年が肯定的に捉える傾向が示された。また、対父親葛藤、対母親葛藤における父親、母親の対応について現在肯定的、中立的に捉えていることは葛藤が収束していることと関連があることが示された。これらは、仮説を支持するものである。青年期における家族内葛藤を乗り越えるためには、親の対応が納得のいくものであることが重要であると考えられる。

また、同居の有無と家族内葛藤の収束についてである。現在、家族と同居していないことと対母親葛藤と対両親葛藤が収束していることとは関連があることが示された。これは仮説を指示するものである。ただし、一概に家族と離れることにより、家族内葛藤が収束するとは言えない。家族と離れることによって、生じる心理的な変化—自立が促進されたり、親の有難みを知り、親の視点を得ることが可能となったり—が家族内葛藤の収束にとって重要であると推察される。

3) 家族内葛藤と家族アイデンティティ発達の関連

まず、家族内葛藤の有無と家族アイデンティティ発達の関連についてである。家族内葛藤の有無により、家族アイデンティティの発達レベルには差がないことが示された。ただし、家族内葛藤を体験していない青年は家族内葛藤を体験している青年よりも、他の家族成員の価値観と一致した価値観をもっていることが示唆された。青年期の発達課題である自己の価値観の確立が、親の価値観

を一度否定するという葛藤体験を乗り越えることにより、なされるものであるため、葛藤を体験していない青年の方が、家族（主に親）の価値をよく受け入れていると考えられる。次に、家族内葛藤の収束と家族アイデンティティ発達の間連についてである。青年期に体験した家族内葛藤が収束している青年は、まだ持続している青年よりも家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示された。以上の2点から、家族内葛藤の有無により家族アイデンティティの発達レベルに差が見られなかった原因として、家族葛藤有り群には、家族アイデンティティの発達レベルの異なる葛藤収束群と未収束群の両方が含まれていることが考えられる。したがって、家族内葛藤の有無と収束したか否かの両方の視点を用いて分類し、検討する必要がある。

そこで、家族内葛藤の有無と収束したか否かの組み合わせにより、①有り・収束群、②有り・未収束群、③無し群の3群に分類し、家族アイデンティティの発達レベルについて検討した。その結果、家族内葛藤を体験し、既に収束している方が、体験したがまだ収束していないよりも家族アイデンティティの発達レベルが高くなる傾向が示唆された。したがって、家族アイデンティティの形成・発達にとって、家族内葛藤を体験し、乗り越えることが重要であるという仮説が支持された。岡本(2007)によると、危機とは、「決定的転換の時期」であり、「心がさらに成長、発達していくか、逆に後戻り、退行して行くかの岐路」である。そして、そればこれまでの自分はもはや維持できない。今までの自分では生きていけない」という感覚として体験され、“アイデンティティの危機”に匹敵するものがある(岡本, 2007)。青年期における家族内葛藤を人生における1つの危機体験として捉えるとすると、家族内葛藤有り・収束群は危機体験から回復し成長した状態にあると解釈できる。また、家族内葛藤有り・未収束群は危機体験した後、拡散した状態にある、もしくは危機体験後に回復するために努力している状態にあると解釈できる。家族内葛藤無し群は危機を経験していない状態にあると解釈できる。

仮説以外で、家族内葛藤無し群について注目すべき点がある。それは、家族内葛藤を体験していない青年も家族内葛藤を体験し、乗り越えた青年と同様に家族アイデンティティの発達レベルが高いことが示唆されたことである。本研究における調査対象者のうち26.8%は青年期において家族内葛藤を体験していなかった。これらは、現代家族において、青年期に親と対立することが一度もなく、家族と同じような価値観をもち、家族関係が良好である青年が多く存在することを示している。この結果は、青年期における家族内葛藤が家族アイデンティティ発達に絶対的に必要なものではないことを示しているように思われる。

しかしながら、家族アイデンティティ得点が高いからといって、青年期において家族内葛藤を体験していない青年の家族アイデンティティは本当に成熟したものであるかには疑問が残る。家族内葛藤を体験していない青年の方が、家族（主に親）の価値をよく受け入れているという点に注目すると、家族内葛藤体験が無く、家族アイデンティティの発達レベルが高い青年の解釈の1つとして、アイデンティティ・ステータスの早期完了型と同じメカニズムを有している可能性が挙げられる。早期完了型とは、危機は体験していないがコミットメントは表明している人であり、Marcia(1966)の記述によれば、「彼の親が彼に与えた目標がどこで終わり、彼自身自身の目標がどこから始まっているのかを見分けることは難しい。彼は周囲の人間が子どもとしての彼の準備し、期待してきたもの

になるとしている」とされる人である。また、権威主義的であり、自立性が低いことが指摘されている(杉原, 1988)。以上の特徴より、早期完了型の青年は、親の期待と自己との間の葛藤が少ないため、親と対立することがなく、青年期においても児童期に引き続き良好な関係が保たれ、家族アイデンティティ得点も高くなると考えられる。しかしながら、早期完了型は、アイデンティティ拡散地位と同様に発達レベルが低く、本当の意味での成熟に至っている状態ではない。こういったことから、家族内葛藤を体験し、乗り越える重要性が生じると考えられる。ただし、家族内葛藤を体験しなかった青年全てが、早期完了型というわけではない。この点については、家族内葛藤を体験しない背景も含めて、より詳細に検討する必要がある。

最後に、親の対応についての評価と家族アイデンティティ発達に関連についてである。父親、母親の対応に対して現在、肯定的な評価をしている方が、家族アイデンティティの発達レベルが高い傾向にあることが示唆された。この結果と父親、母親の対応について現在肯定的な評価をしていることは家族内葛藤が収束していることと強い関連が有るという結果をあわせて考えると、家族内葛藤における親の対応に納得し、家族内葛藤を乗り越えることは家族アイデンティティ発達にとって重要であるといえる。

4) 今後の課題

本研究では過去の体験について、自由記述形式で調査したため、情報量が少なく、質的検討を十分に行えなかった。今後の課題として、面接調査を実施し、家族内葛藤を乗り越えるプロセスと家族アイデンティティ発達に関連について、さらに詳しく検討する必要がある。

引用文献

- 林 那奈・岡本祐子 (2003). 青年の家族行事体験が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響 青年心理学研究, 15, 17-31.
- 林 那奈・岡本祐子 (2005). 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達に関連 家族心理学研究, 19, 13-29.
- Kroger, J. (2000). *Identity development : Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA : Sage. pp.25-47.
- (クロガー, J. 榎本博明 (訳) (2005). アイデンティティの発達—青年期から成人期— 北大路書房)
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 永田彰子 (2002). 関係性から見た生涯発達——アイデンティティを育てる土壌としての「関係性」—— 岡本祐子 (編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 pp.121-147.
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 杉原保史 (1988). 自我同一性地位における早期完型について——事例に基づく考察—— 心理臨床学研究, 19(3), 266-277.